

一分の一の道

旭川市立永山南中学校 三年 長尾 果乃子

僕は周りから何とカウントされているだろう。あくまでもクラスメートの一人、三十五分の一だろうか。あくまでも三年生の生徒の一人、百七十いくつか分の一だろうか。LGBTの割合、十三分の一だろうか。でも僕は、僕しかいない、一分の一ははずだ。

僕は男だ。しかし体は女性の体をしている。いわゆるトランスジェンダーだ。今は男子制服を着ていて、男性として生活している。しかし、更衣室は女子更衣室、トイレも女子トイレ、修学旅行の班も女子班と、これはもしかや男子制服を着ている女子生徒と思われているのではないかと感じることもある。更衣室は仕方ないかもしれないが、いつもドアが一番近いすみの方で壁に向かっていている。大変気まずい。せめてパーテーションか何かしてほしい。トイレは吐く時くらいしか使わない。なので困っていないと言えは困っていないが、もしも吐く時に男子制服で女子トイレに入るのを全く何も知らない人を見るとどう思うだろう。改めて学校で吐きたくないなど思った。人間は吐きたくないと思ってしまう生物だっただろうか。どうしても、周りの人の考えと自分の考えにギャップを感じる。いや、考え方が人それぞれなのは当たり前なのだが、女性として扱われているな、トランスジェンダーとして扱われているな、と感じる。僕は僕なのに。もっと表面的に言うと、僕は男なのに、と。

部活の友達にカミングアウトした時、似たようなことを言った気がする。自分は男として生きたくて、手術もしたい、と。彼女達は、僕が全く別の人になってしまうとも思ったのかもしれない。ノートタイムで「なんで」と言われた。なんでも言われましても、そういうものだから、と言うと、またすぐに「男になっちゃうの?」と言われた。なっちゃうとはなんだ、僕からしたら今の方が辛いし、男として生きるのは急なルート変更じゃなくて歩き続けていれば景色が変わるのと同じことだ、という思いを込めて、彼女らに「いや、俺は俺だから」と言った。すると納得してくれたよううで、少し考えてから「呼び方変えた方がいいかな」と聞かれた。改名はするのか、したら何になるのかを聞かれたので、今のところは和樹のつもりだと答えた。今、彼女達には長尾くんと呼ばれている。おい、下の名前関係ないじゃないか、と思ったが

嫌な気持ちではしなかった。

僕が男性として生きていくのは、僕がトランスジェンダーだからじゃない。僕は僕だからだ。辛いことだって苦しいことだって、死にたくなかったことだってある。でも僕の歩いている道は、苦楽あれど暗くはない。だからきっと大丈夫だ。一分の一の道に行く。我が道を行くなんて言葉があるけれど、本来みんなそのはずなんじゃないかなと思う。迷うことも立ち止まることも、道を歩くうちの一つだ。もし、僕が急に別の人になったと感じたり、女性に戻ってほしいと思う人がいたならば、僕は何度だって、友達へ言ったものと同じことを言おう。大丈夫、俺は俺だよ、と。

気高く、誇りを持って、我が道に行く。歩いてきた中でなくしたものも手に入れたものもある。景色は変わって、忘れた景色もあるかもしれない。でもその全てをひっくりめた今の僕を、全力で愛したい。僕は一分の一の道を歩く。道しるべなんかはいらない。僕は僕しかいないから。一分の一の僕だから。